

令和3年度 第1回病院構造改革委員会議事要旨

- 1 日 時： 令和3年9月8日（水）13:00～15:00
- 2 場 所： テレビ会議
- 3 出席者： 出席者名簿(P7)のとおり30名（委員9名、事務局等21名）
- 4 議 題： 令和2年度病院構造改革推進方策実施状況の自己点検・評価について
- 5 主な内容：

（1）事務局説明

- ・資料1及び資料2に基づき、令和2年度病院構造改革推進方策実施状況の自己点検・評価について説明
- ・参考資料1に基づき、令和2年度兵庫県病院事業の経営状況について説明
- ・参考資料2に基づき、一般会計負担金の状況（令和2年度）について説明

（2）意見交換

（委員）

- ・県立病院では、切迫早産や循環器疾患等の急性期疾患を抱えるコロナ患者の受入れはどのように対応されているのか。

（事務局）

- ・当院では、急性期疾患を抱えている感染患者はICUで受入れている。
- ・妊産婦については、合併症を有する方や早産児・低出生体重児の場合、分娩対応可能な陰圧個室で受入れている。

（事務局）

- ・当院でも、低出生体重児の場合やかかりつけ患者については、受入れる体制を整えている。

（事務局）

- ・当院では、圏域内で発生したクラスター感染の外国人妊産婦や、圏域外での出産後の感染患者の受入れ実績があり、病院間で連携して周産期の感染患者の受入れを行っている。

（委員）

- ・県立病院では、院内クラスターが発生したことはあるのか。

（事務局）

- ・当院では、本年4月にクラスターが発生し、GW明けまで感染患者の対応を行った。

（事務局）

- ・当院でもクラスターが発生した。デルタ株の発生により感染リスクが上がっており、院内感染者ゼロはあり得ないと考えている。そういった中、当院では早期発見・対応

を心がけ、その後クラスターは発生していない。

- ・患者入院後に濃厚接触者であることが発覚し、無症状であるが検査をすると陽性であったといった事例はいくつか発生しており、常に院内感染リスクを抱えていることから、引き続き職員一丸となって院内感染対策を徹底していく。

(事務局)

- ・当院ではこれまでに1,000人以上の感染患者を受入れてきた。また、抗体カクテル療法の専用病床を設けて治療を開始し、現時点で100人超の治療を行っている。

(委員)

- ・本県では、第1波に精神病院でクラスターが発生した際に、ひょうごこころの医療センターから精神疾患患者ケアの経験が豊富な看護師を派遣するなど、他の都道府県との比較において、病院間の連携が非常にうまくいっていると思う。
- ・新型コロナウイルスとの戦いは長期化が予測される。病院職員のワークライフバランスの確保や心のケアに留意しながら対応していかなければならない。

(委員)

- ・先ほど抗体カクテル療法について話があったが、その他の県立病院では実施しているのか。また、外来で実施する予定はあるのか。

(事務局)

- ・当院では、認可された当日から外来で実施している。

(事務局)

- ・当院でも外来での実施を検討したが、スペースやスタッフの確保が困難だったため、1病棟を専用病床として確保し、2泊3日程度の入院により実施している。

(会長)

- ・コロナ禍では、地域医療機関との連携が難しかったと思うが、会議の開催や患者の紹介・逆紹介について工夫されたことはあるか。

(事務局)

- ・当院の所在する圏域では、従来から顔の見える関係ができており、また、医療情報連携システムが整備されていることから、オンラインによる医療機関同士の連携がうまく機能している。

(事務局)

- ・緩和ケア研修会については、オンラインで実施できる体制が整いつつある。
- ・当院の患者数は昨年度の減少から回復しておらず、昨年来の受診控えや患者がワクチン接種で頭がいっぱいであることが影響していると考えられる。当院では初診時に内視鏡検査を新たに開始したが予約は少なく、他院でも検査数が減少していると聞いている。その結果、がんが進行してから来院する方が増えているため、健診の受診や早期治療を促進するための情報発信を行っているところである。

(事務局)

- ・高齢者の多い地域では地域医療連携がより重要であるが、当院ではオンラインの活用によりコロナ禍以前と同様の連携状況を保っている。
- ・緩和ケア研修会については、各施設においてオンライン設備が整備されてきたため、コロナ禍以前の状態に早く戻していきたい。

(会長)

- ・一般救急医療に対するコロナの影響はいかがか。

(事務局)

- ・人流が減り大きな事故は減少傾向にあるが、重篤な病気や外傷を抱えた方は一定数おり、救急医療の関係者間で役割分担を協議した結果、他院がコロナ診療に専念せざるを得ない状況を考慮し、当院はコロナ以外の救急医療を引受けることとなった。なお、当院で受入れた患者のコロナ陽性が判明した場合は、他院へ搬送することとしている。

(委員)

- ・資料2の1ページに「新型コロナウイルス対応に全力で取り組んだ」とあり、病床確保などのハード面の取り組みが中心の記述になっているが、多くの職員がコロナ患者の対応やコロナに関する研修を受講しているはずであり、例えば、延べ何人の職員がコロナ対応に携わり努力したのかを表現する必要があるのではないか。このことは、そのトレードオフとして通常医療に影響を与えたことも含む表現であり、コロナ対応と通常医療の両方に取り組んだことがわかるようになるので、ご検討いただきたい。
- ・また、3ページの神戸大学との調査研究の成果や、その活用状況はいかがか。

(事務局)

- ・コロナ対応に携わった職員数については、ご意見を踏まえて資料に追記させていただく。

(事務局)

- ・神戸大学との調査研究については、まず医療従事者の感染状況を確認するため、加古川医療センター職員を対象に調査を行った。その結果、全員が抗体を保有しておらず、感染歴がないことがわかった。また、対象者を県立病院等の患者や一般県民に拡大し、過去の感染やワクチン接種による中和抗体の保有状況の調査を継続しており、結果がまとまり次第公表することとしている。

(会長)

- ・昨年度の本委員会でも県民等への情報発信が不足しているのではないかという意見があったので、コロナ対応をはじめとする県立病院の取り組みをもっと発信していただきたい。

(委員)

- ・本日の資料は実績が数値で示されていることから、県立病院の取り組んできたことがよくわかり、安心して医療が受けられる体制が整えられているということを実感した。ラジオへの出演調整等は協力できるので、県立病院の取り組みをわかりやすい表現で広く発信していただきたい。

(委員)

- ・コロナ禍における経営上の大きな問題は新規患者数の減少であり、例えば小児患者が全体として減少していると考えるが、病院の実感はいかがか。

(事務局)

- ・当院の小児患者は昨年度から6～7割に減少しており、マスク着用によって通常流行するRSウイルスや気管支炎患者が少なかったことや、少々の発熱では保護者が受診を控えたことが影響したと考えている。今年度に入ってから、患者数は元の水準に

戻っている。

(事務局)

- ・昨年度はRSウイルスに加えてインフルエンザ患者がほとんどおらず、小児の救急患者数、特に初期救急の患者数が全体的に大きく減少し、通常の2～3割にまで減少した医療機関もあると聞いている。
- ・今年度に入ると、RSウイルスの流行や、第5波に入って入院が必要な小児のコロナ患者が増えたことにより、当院の救急患者数は元の水準に戻っている。コロナ患者については、8月以降は基本的に毎日1名以上の患者が入院しており、今後は小児などのワクチンが行き届いていない患者の対応が課題になると懸念しており、対策を練っているところである。

(委員)

- ・参考資料1の(1)に「診療報酬の増額や空床補償等により、減収分は概ね補填され、経常損益が黒字となった」とあるが、コロナ対策に全力で取組んだ一方で、県立病院に求められる機能をできるだけ維持したことの両面により黒字を達成したのであり、正確な表現になっていないのではないかと懸念している。空床補償が黒字化にどれだけ影響したのかは正確にわからず、職員の努力により収入の減少を抑えた効果も含まれているはずであり、ここまで決めつけた表現にしないほうがよいと思う。

(事務局)

- ・令和元年度との比較において、医療収益が減少した一方、空床補償を含むその他収益の増加が減収分を上回ったため、このような表現としている。

(委員)

- ・そもそも空床補償という文言が適切な表現になっていないのではないかと懸念している。感染患者の受入れ体制を確保するには、単にベッドを空けておくだけでなく、スタッフや医療資材を十分確保しておくことも必要であり、そのトレードオフとして通常医療には制約が加わることになる。空床補償という文言では、単にベッドを空けておくだけでお金が入るといった誤解を招き、こういった県立病院の取り組みが適切に伝わらないと考える。

(事務局)

- ・感染患者の受入れにあたっては、一般病棟のスタッフをコロナ病棟に投入するために他の病棟を空けざるを得ず、ここに空床補償が発生している。病院の努力も含め、実態が適切に伝わるよう、表現を工夫したいと思う。

(会長)

- ・ここまで県立病院の取り組みについて意見交換をしてきたが、民間病院の経営状況はどうか。

(委員)

- ・民間病院については、コロナ患者を受入れている病院を中心に、約7割の民間病院は現在も赤字である。民間病院も県立病院と同様にコロナ病床の確保に努めており、経営のことは一旦置いておいて、一生懸命医療の提供を行っているところである。

(会長)

- ・コロナ禍が長期化する中、安定した医療提供体制を維持していく観点からご意見はあ

るか。

(委員)

- ・コロナ禍によって、医師の診療科及び地域偏在が露わになったと思っている。入院基本料が低すぎることにより、外来診療に人材が偏り、その結果、地方だけでなく都市部でもICUの不足や感染症専門医の不在が生じており、早急に対応しないと次の波や新たな感染症に対応できないと危惧している。

(会長)

- ・新病院の開院を控えている病院の人材確保・育成の状況はいかがか。

(事務局)

- ・当院では、建設工事は問題なく進んでいるが、コロナ対応によってスタッフの新病院に向けたトレーニングが遅れがちになっている。
- ・また、働き方改革については、令和6年4月までに時短計画を作成し、第三者機関による評価を経てB水準の指定を受ける予定であるが、統合に関する業務及びコロナ関連業務と並行して作業を進めることが厳しい状況にある。
- ・新たに雇用することになる医師や看護師、各種補助者については、開院までに予定人数を確保できる見込みである。

(事務局)

- ・当院では、基本設計がほぼ終了し、実施設計に入ろうとしている。
- ・また、出身大学や勤務経験が異なる医師をまとめ上げ、1つのチームをつくることが重要であると考えている。
- ・働き方改革に関しては、勤怠管理システムを用いた勤務時間の適切な把握に取り組んでいるところである。

(会長)

- ・病院局での人材確保や働き方改革の取り組み状況はいかがか。

(事務局)

- ・働き方改革を進めるにあたり、事務職員数の増員や専門性の向上が不可欠であると考えている。今後、関係部署との調整を本格化させていき、医療に思い入れのある事務職員の確保・育成に努めていきたい。

(事務局)

- ・これまでの行財政改革によって県全体の事務職員が減少し、県立病院もその影響を受けている。新病院開院に伴う医療事務職の創設を突破口に県立病院固有の事務職員を採用できるようにし、職員数の確保に努めるとともに、M×M K O B Eの受講等による専門性の向上にもしっかりと取り組んでいきたいと考えている。

(会長)

- ・粒子線治療やリハビリテーション医療、精神医療の現状はいかがか。

(事務局)

- ・当院の患者数もコロナの影響を受けており、山陰や四国地方などの遠方患者の移動控えがみられる。
- ・今後の粒子線治療患者数の動向については、令和4年度の診療報酬改定が大きなポイントとなる。現在、粒子線治療やがん治療の関係者のもとで、国内の全粒子線治療施

設での治療データをとりまとめているところである。取りまとめ後は、厚労省の先進医療会議に提出するとともに、医療関係者に広く周知し、多くの方に粒子線治療の有効性を知っていただきたいと考えている。

(事務局)

- ・当院では、コロナの影響により九州や中四国の患者数が減少しているほか、講演会などの広報活動が制約を受けており、オンラインを活用しているが厳しい状況にある。

(事務局)

- ・当院では、脳卒中患者や脊椎損傷などの外傷患者が減少している一方で、自宅退院できないポストコロナ患者の病床を確保し、受入れを行っている。

(事務局)

- ・当院では、昨年度は県外からの神経難病などの患者数が減少したが、ワクチン接種が進むに連れて、今年の夏頃から元の水準に戻りつつある。
- ・また、診療内容の可視化に力を入れており、認知症疾患センター及び神経難病リハビリテーションセンターなどの診療内容の情報発信に取り組んでいるほか、昨年摂食嚥下支援センターを立ち上げ、高齢者を中心とする誤嚥性肺炎を起こしやすい方を対象に、嚥下評価及び相談治療を開始している。

(事務局)

- ・先ほども話題にのぼったが、精神疾患を抱えるコロナ患者の入院や、行政と医療機関との連携については、本県は他の都道府県と比較して、早期に体制を構築できたと実感している。
- ・昨年度は、コロナ患者を受入れるために救急病棟を閉鎖して以降、病床利用率が大きく落ち込んだが、11月の再開以降は、徐々にではあるが回復している。

(会長)

- ・時間となったのでこれで議論を終えたいと思う。本日の議論を受けて事務局で必要な修正をしていただき、内容の確認は私に一任いただきたいがよいか。

(全委員)

- ・異議なし

(会長)

- ・それでは、今後は私と事務局の方でとりまとめた後、公表する。

(事務局)

- ・次回は、令和4年度実施計画策定について議論いただくため、3月頃に委員会の開催を予定している。

出席者名簿

(委員)

区分	所属	委員名			
学識経験者	神戸大学大学院医学研究科循環器内科学分野教授	ヒラ	タ	ケン	イチ
	兵庫県参与、全国自治体病院協議会名誉会長	ヘン	ミ	キミ	オ
	神戸大学大学院医学研究科 特命准教授	コ	ハヤシ	ダイ	スケ
	鶴見大学公共医科学研究センター 客員研究員	タニ	ダ	カズ	ヒサ
団医療	兵庫県看護協会 会長	ナリ	タ	ヤス	コ
	兵庫県民間病院協会 会長	ニシ			タカシ
医療を 立場を受け	ラジオ関西編成営業局専任局長	ヤマ	モト	ジュン	コ
	公 募 委 員	フジ	ク	ホ	マ
	公 募 委 員	ヒロ	ドウ	ジュン	コ

(病院局・県立病院)

	所 属	氏 名			
病院長・センター長	尼崎総合医療センター 院長	ヘイ	ケ	トシ	オ
	西宮病院 院長	ノ	グチ	シン	ザブ
	加古川医療センター 院長	ハラ	ダ	トシ	ヒコ
	丹波医療センター 院長	ニシ	サキ		ホガラ
	淡路医療センター 院長	スズ	キ	ヤス	ユキ
	ひょうごこころの医療センター 院長	タ	ナカ		キウム
	こども病院 院長	イ	シマ	カズ	モト
	がんセンター 院長	トミ	ナガ	マサ	ヒロ
	姫路循環器病センター 院長	キノ	シタ	ヨシ	カズ
	粒子線医療センター 院長	オキ	モト	トモ	アキ
	神戸陽子線センター 長	ソエ	ジマ	トシ	ノリ
	災害医療センター 長	ナカ	ヤマ	シン	イチ
	リハビリテーション中央病院 院長	ハン	モト		ヤスシ
	リハビリテーション西播磨病院 院長	カ	フ	ジュン	イチ
病院局	病院事業管理者	スギ	ムラ	カズ	ロウ
	病院事業副管理者	ヤ	ギ		サトシ
	病院局長兼管理課長	アキ	ヤマ	テツ	シ
	企画課長	カシワ	ギ	ヒデ	シ
	管理課 参事	カワ	イ	タツ	ヤ
	管理課 参事	オク		ユ	カ
	経営課長	ワ	ダ	コウ	ジ